

2026年度

横浜国立大学大学院国際社会科学府入学試験問題
出題意図

分野 経営学 問題番号 1

出題意図

オペレーション・マネジメントが企業経営で果たしている役割や、代表的なオペレーション・マネジメントのアプローチや手法への理解度を問うことを意図している。

解答のポイント

問1

1. オペレーション・マネジメントが何であることを説明する。
2. オペレーション・マネジメントにおけるインプット、変換プロセス、アウトプットについて説明する。
3. オペレーション・マネジメントがなぜ必要であるかを説明する。

問2

1. オペレーション・マネジメントのアプローチや手法を1つ以上挙げる。
2. 列挙したオペレーション・マネジメントのアプローチや手法について説明する。

出題範囲・推奨テキスト

1. 塩次喜代明・高橋伸夫・小林敏男（2009）『経営管理 新版』有斐閣、p.237、p.240-242.
2. スティーブンP. ロビンズ・デービッドA. ディチェンゾ・メアリー コールター（高木晴夫監訳）（2014）『マネジメント入門 グローバル経営のための理論と実践』ダイヤモンド社、p466-498.

2026年度

横浜国立大学大学院国際社会科学府入学試験問題
出題意図

分野 経営学 問題番号 2

出題意図

グローバル社会を生き抜く多くの企業にとって、組織のグローバル化は重要な経営課題である。そのため、組織のグローバル化に関する基本的な知識を有しておくことは、経営学研究を進めるうえで必須と考えられる。そこで、組織のグローバル化に関する知識のうち、海外進出の手法および多国籍企業（MNC）の形態に関する基本的な知識を有しているかどうかを確認することが、今回の出題の意図である。

解答のポイント

問（1）

1. 組織がグローバル化する際に、多額の海外投資を伴う代表的な手法は、①（グローバルな）戦略的提携や②海外子会社の設立があげられる。

2. ①は、海外のパートナー企業と協力関係を結び、資源や知識を共有して事業展開を行うものである。ときには、新たな独立組織をつくるジョイントベンチャーを行うこともある。こうした協力関係を得ることによって、グローバルな競争への参入を比較的容易に実現できるようになる。②は、海外直接投資を行うことによって本国組織とは別組織を現地に設ける手法である。国際経営の方針に応じて各海外子会社をマネジメントできる。この手法は投入資源とリスクが最も大きいという特徴もある。

①、②のどちらかを選択し、特徴を論じることが解答には求められる。

問（2）

1. MNCの形態としては、①マルチドメスティック企業、②グローバル企業が有名である。他にも③トランスナショナル組織（ボーダレス組織）があげられる。

2. ①マルチドメスティック企業の最大の特徴は、そのマネジメントや意思決定が事業を行う現地国に分散し、現地国側マネジャーが責任をもってそれぞれの国の特性に応じた戦略を策定・実践していることである。②グローバル企業の最大の特徴は、そのマネジメントと意思決定が本国で一元的になされ、世界的な効率性を高めることを重視した経営スタイルをとっていることである。③トランスナショナル組織は人為的な地理的国境を排除した組織編成を採用し、世界市場において効率的かつ効果的なマネジメントを追究している。

これらのうち2つを選び、特徴を論じることが解答には求められる。

参考図書

スティーブン P.ロビンズ・デービッド A.ディチェンゾ・メアリー コールター（高木晴夫監訳）（2014）『マネジメント入門 グローバル経営のための理論と実践』ダイヤモンド社、64-69頁。

2026年度

横浜国立大学大学院国際社会科学府入学試験問題
出題意図

分野 経営システム 問題番号 3

出題意図

相関係数、回帰分析など統計分析を適切に行い、その結果を考察する能力を問う問題。

解答のポイント

- 問1 相関係数を適切に算出し、その結果を考察する。
- 問2 回帰分析の切片、傾きを適切に算出し、その結果を考察する。
- 問3 回帰分析の決定係数を適切に算出し、その結果を考察する。

問題番号 3 解答例

出題箇所:いずれも倉田・星野の「入門統計解析」における下記のページに基づき出題。

問 1 P.70-71 から出題

問 2 P.79-80 から出題

問 3 P.85 から出題。

○問 1 の解答例

変数 x と y の標準偏差を求める。

$$s_x = \sqrt{100} = 10 \quad s_y = \sqrt{400} = 20$$

相関係数の公式に値を代入する。

$$r = 160 / (10 * 20) = 160 / 200 = 0.8$$

この値は広告宣伝費と新規契約数の間に強い正の相関があることを示している。広告宣伝費が増加すると新規契約数も増加する傾向が強い。

○問 2 の解答例

回帰係数の公式に値を代入する。

$$b = 160 / 100 = 1.6$$

切片の公式に値を代入する。

$$a = 80 - (1.6 * 50) = 80 - 80 = 0$$

回帰式を記述する。

$$Y = 1.6X$$

回帰係数 $b = 1.6$: 広告宣伝費が 1 万円増加すると、新規契約数が平均して 1.6 件増加することを示している。切片 $a = 0$: 広告宣伝費が 0 万円の時の新規契約数の予測値が 0 件であることを示している。

○問 3 の解答例

決定係数は相関係数の 2 乗と一致する。

$$R^2 = (0.8)^2 = 0.64$$

決定係数は新規契約数の変動の 64% が広告宣伝費によって説明できることを示している。残りの 36% は他の要因による変動である。モデルの説明力は比較的高いと言える。

2026年度

横浜国立大学大学院国際社会科学府入学試験問題
出題意図

分野 経営システム 問題番号 4

出題意図

統計学、統計解析における基本的な概念の意味を理解しているかどうかを問う。

推奨テキスト及び関連ページ

倉田博史・星野崇宏『入門統計解析 第2版』新世社

- (1) p. 124
- (2) p. 191
- (3) p. 229
- (4) p. 78
- (5) p. 317
- (6) p. 329

2026年度

横浜国立大学大学院国際社会科学府入学試験問題
出題意図

分野 会計学 問題番号 5

出題意図

利益はキャッシュ・フローを期間配分したものであるから、キャッシュ・フローと利益の関係を正しく理解しておくことは、財務会計のコアとなる利益を研究するうえで欠かせない。本問は、貸借対照表と損益計算書の情報からキャッシュ・フロー計算書を作成させることと、作成・開示されるキャッシュ・フロー計算書の情報内容を問うことにより、キャッシュ・フローと利益の関係を正しく理解できているかどうかを確認することを意図している。

解答（あるいは、解答のポイント）

(1)

- ① 150 百万円
- ② 1,800 百万円

(2)

営業活動によるキャッシュ・フロー合計＝当期純利益＋減価償却費－売掛金の増加額－商品の増加額

(3)

- ① △100 百万円
- ② △500 百万円
- ③ 400 百万円

(4)

- 1. 利益にどれだけ資金的裏付けがあるかを示すことで、利益の質の評価に資する情報を提供する。
- 2. 資金繰りの観点から企業の安全性の評価に資する情報を提供する。

(5)

方法1：受取利息・受取配当金・支払利息を営業活動に区分し、支払配当金を財務活動に区分する。

(特徴) 営業活動によるキャッシュ・フロー合計は、経常利益と同様に、経常的な収支を示す。

方法2：受取利息・受取配当金を投資活動に区分し、支払利息・支払配当金を財務活動に区分する。

(特徴) 投資活動によるキャッシュ・フロー合計に投資活動の成果として得られた収入が含まれ、財務活動によるキャッシュ・フロー合計に資金調達から生じた犠牲たる支出が含まれる。

以上

2026年度

横浜国立大学大学院国際社会科学府入学試験問題
出題意図

分野 会計学 問題番号 6

出題意図

変動費と固定費は、経営判断の精度向上、コスト・マネジメントの推進、業績評価などにおいて、現代の経営管理においても多く使用されている。このような変動費と固定費は、原価計算および管理会計の基礎知識として位置づけられ、営業量の変化によって分類される原価として周知されている。そこで、本問では、営業量の変化という観点から、変動費、固定費の説明を求めた。

解答のポイント

変動費と固定費のそれぞれについてグラフを作成し、具体例を用いてその内容を説明する。

推奨テキスト関連ページ

・岡本清 (2000) 『原価計算 (六訂版)』国元書房. pp.47-51.